



No.104

2017年3月2日

公益社団法人日本山岳会富山支部

第8回山岳講演会「県警山岳警備隊の活動状況」を開催

恒例の日本山岳会富山支部山岳講演会を平成29年2月22日（水）午後6時半から富山県民会館401号室で開催した。今回の講師は富山県警山岳警備隊長である高瀬洋支部会員。氷見市生まれで、海に浮かぶ立山連峰をながめて育ったと自己紹介。立山に登ったのは警察官になってからとのこと。昭和53年9月に山岳警備隊に入隊。初めての遭難事故出動は別山での中学生の落雷事故だった。娘さんからも「のんきなお父さん」と言われるような性格で、失敗も多かったがそこから多くのことを教わって成長してきたとのこと。

次に11分間のDVD映像で同隊の50年のあゆみを紹介（昭和40年発足の山岳警備隊は一昨年50周年をむかえた）。そのあとはパワーポイントを使っの講演に入る。現在日本一の山岳レスキューチームとして評価の高い県警山岳警備隊の



活動や日頃の訓練状況などのスライドを見ているうち、予期せぬパソコントラブルが発生。スライドが次に進まなくなったため回復まで会場の照明をつけスライドなしで話し続けること2回。平成20年に第27代の山岳警備隊長に就任してから実践してきたこと、殉職事故時の苦悩、遭難事故防止への熱い思いなどを語った。最後に質問を受けたあと、本年3月末をもって定年を迎え警備隊長を退く高瀬氏に森田会員からチューリップの花束を贈呈し、山岳講演会を終了した。当日の来場者は支部会員20名、岳連関係12名、その他44名だった。富山県山岳連盟協賛、北日本新聞社後援。

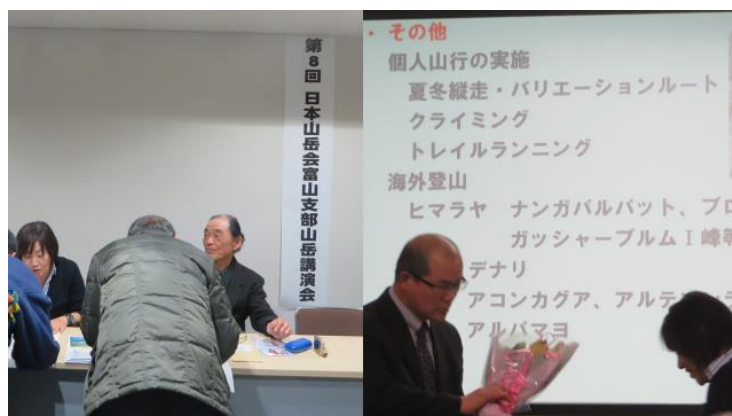
（山田信明 記）

目	次
第8回山岳講演会「県警山岳警備隊の活動状況」を開催山田信明	親睦会総会・1月例会山行・瀬戸蔵山・・・近藤晋 7 2月例会山行・高坪山.....渋谷茂 8
五支部合同懇親山行・天生湿原.....有澤辰彦	2 日本山岳会富山支部創立70周年記念事業
山岸和子さん追悼登山・千石城山.....金尾誠一	3 実行委員会だより.....松本睦男 9
西川雄策さん追悼登山・袴腰山.....山田信明	4 ネパール地震復興支援ツアー報告・・・北田幹夫 10
平成28年度支部長会議の報告.....山田信明	5 コスタリカ道中記.....鍛冶哲郎 12
平成28年度年次晩餐会・記念懇親山行に参加して	日本初のヒマラヤ遠征に関わる話(1)・・・佐伯郁夫 14
.....河合義則・森田裕子	5 会員動向 15
12月例会報告.....有澤辰彦	7 平成29年度 富山支部総会 編集後記・・・渋谷茂 16

第8回山岳講演会より



富山県警山岳警備隊の活動



受付の様子・花束贈呈

五支部合同懇親山行・天生湿原

期日：平成 28 年 10 月 16 日(日)～17 日(月)

参加者：山田、木戸、川田、本郷、河合、有澤

少し曇り空の中、予定通り木戸自工を出発。神通川沿いを飛騨古川に進むごとに空は晴れ間が増して気持ちのいいドライブです。しかし、この街道は年を追うごとに整備され、神岡・高山がいちだんと近くなる喜びを感じているうち、11:00 に駅前の飛騨古川スペランツァホテルに到着。受付では、岐阜支部の丁寧な説明を受け第1日目の天生湿原散策まで時間があり昼食をとる。



キッチリ的人数を乗せたマイクロバスは360号線で天生峠へ。天気も良く山腹を登るにつれ紅葉が現れてきた。13:00 天生峠着。天生湿原へ出発。登り口では登山靴の底を洗う水場と協力金の受取場があり、力の入った自然保護の取組に感服です。きれいに整備された道は大勢の人でにぎやかです。13:30 天生湿原到着。カラ谷分岐から先の木平湿原を目指したが時間切れのため途中で断念した。

天生峠より次の鳩谷八幡神社「どぶろく祭」に向かう。神社では丁度おごそかな獅子舞が奉納されており、たくさんを見物人が見とれております。我々も購入した盃でどぶろくを一口飲み神社前でこれからふるまわれる、どぶろくの準備に見入っていたら、割烹着すがたの奥様方が2列に勢揃いされ、その様は、なんとも美しい光景です。女性の割烹着姿にはただただみとれます。カメラ衆がさかんにシャッターをきります。注がれるどぶろくを遠慮なしに、我が会員は、しこたま飲み干して満足満足。

18:00 予定通りホテルの懇親会場で宴に入りました。いつもの紹介、説明風景ではありますが皆さん、ほんとうに、やさしい顔をしておられました。部屋に帰ると外は雨。予報通りで明日は中止の予感を感じながら寝る。



翌日、朝食会場で担当者から第2日目の猪臥山登山の中止が告げられ、各支部自由行動とのことです。我が支部は有名な蓬萊の酒蔵へ一目散に。運転手の私以外はチビリチビリと試飲に余念がありません。目的の酒を購入したので富山へ帰ることにしました。

富山に近づくにつれ空は明るくなり青空が見えてきたので、お弁当もいただいていることだし何処かで食べようとなり、猿倉山で悠々と流れる神通川を見下ろして昼食を取りその後木戸自工に戻り解散となりました。

今回は岐阜のお酒に恵まれ、まことにゆったりとした時を過ごしました。岐阜支部の皆様ありがとうございました。(有澤辰彦 記)

山岸和子さん追悼登山・千石城山 757m

期日:平成28年10月22日(土)

参加者:木戸、山田、川田、永山、渋谷、鍛冶、森尻、河合、北田、森田、菅田、金尾

山岸和子さんの追悼登山が上市町・千石城山で行われた。これは山岸さんが所属しておられた山の団体の合同企画という形であった。その団体とは日本山岳会富山支部、富山県山岳連盟、富山市山岳協会、山季会などで参加者は約40名であった。山岸さんのご長男も参加された。9時に上市町



役場駐車場に集合し、各団体毎に車を乗り合わせて上市川第二ダムを経て第一登山口へ向かう。そこから送電線の巡視路を辿る様にして歩き始め稜線に出てしばらくで頂上に着く。過去に何度か山岸さんと一緒に歩いたコースだ。山岸さんであればきっと先頭付近を快適に歩いて行かれただろうなと思う。どの山行でも呆れるほどの健脚ぶりだった。また、歩きながら山の幸を手際よく見つけていかれるのにはいつも感心させられたも

のだった。そんなお元気だった山岸さんが突然逝ってしまわれたと聞いたときは「ええ、なんで。」と体から力が抜けていくようであった。思えば私にとって山岸さんは姉のような存在だった。二人で事務局を担当していた時は、運営上の役を色々遠慮なくお願いしたが、快く引き受けてもらった。また山行には必ずと言っていいほど参加していただいた。山岸さんが行かれる山だからと参加した女性会員も多かったのではなかろうか。気取らない人柄でその場を明るく楽しい雰囲気にされた方であった。

頂上では世話された方々の計らいでお供えが飾られ、鍋汁がふるまわれた。いつの山行でも頂上では山岸さんから果物やお菓子などが出てきたことを思い出す。その前で記念撮影する。また富山支部の木戸顧問をはじめ各団体の代表の方が山岸さんとの出会いや山行の思い出を語られた。その話を聞くとやはりどの会でも皆さんに慕われ頼りにされていたのだなあと改めて山岸さんの優しい人柄を偲ばせてもらった。最後にご長男からこれまでの山での付き合いやこの追悼登山への感謝の言葉が述べられた。なお、この日ご長男が身に付けて来られた服装や持ってこられた山道具はお母さんの形見であったそうだ。

セレモニーを終え、登ってきた道を下って 13 時過ぎに登山口で解散した。一応区切りの行事は終わったが山岸さんとの思い出は生涯忘れないだろうなと思いながら帰途についた。(金尾誠一 記)

西川雄策さん追悼登山・袴腰山 1,165m

期日：平成 28 年 10 月 23 日(日)

参加者：木戸、近藤、松本、島津、山田



西川雄策さんの追悼登山が城端山岳会で実施されたので日本山岳会富山支部からも参加させてもらった。平成 27 年 10 月 28 日に 84 歳で急逝された西川さんが愛した「城端のシンボル袴腰山」が会場。集合場所の南砺市公営駐車場に参加者の車が増えてくる頃、ポツリポツリと雨が降り出した。木戸、松本両氏をのせ高速道路経由で菅沼からの林道を進む。峰越登山口に着くと雨の中、まず城端山岳会創立 60 周年記念の案内看板の除幕式。参加者は合羽を着て袴腰小屋まで登る。こ

こは昭和 34 年に城端山岳会会員が担ぎ上げて建てられた避難小屋(昭和 36 年現在地に再建)。近藤、島津会員も遅れて到着。雨模様のため小屋の中に祭壇がもうけられ、西川さんの遺影と仏具や花が飾られ、追善法要が始まる。本日の実行委員長小原耕造氏の読経に続き全員がお参りをした。大井出恵子会長のあいさつのあと参列者から順に思い出話が語られた。城端山岳会では故人が生前書かれた文章を集めた立派な記念誌をこの日にあわせ作成し参加者に配布された。

法要後ふるまわれたなめこ汁で身体があたたまり、木戸さん、松本さんと三人袴腰山頂上を往復することにした。近藤さん達は下山。頂上の平では、最近標高が 1,165m と測量された最高地点、五箇山側展望所、会発足 10 年で建設された山頂展望台を順に見て回ったが、雨が強くなってきたので

そのまま下山した。帰路は高速を使わず、上梨の山崎富美雄さん(追悼に参加)の店をかりて弁当をひらいた。
(山田信明 記)

平成 28 年度支部長会議の報告

日時：平成 28 年 12 月 3 日(土)10：30～12：30

場所：京王プラザホテル 42 階「高尾」

○会長あいさつのあと以下の会務報告

- ・年次晩餐会関連事項
- ・準会員の入会申し込み状況 10～11 月で計 14 名の申込があった(富山 1 名)
- ・新会員証の提示による提携施設の割引サービスについて：会報 1 月号に掲載
- ・通常総会における定足数の確保について

○準会員制度への取組み状況等 事前報告資料にもとづき各支部長から説明(1 時間 20 分)

○その他

- ・入会のすすめの DVD を各支部に配布し使えるようにする
- ・茨城支部長 全国支部懇 平成 29 年 10 月 13～14 日つくばグランドホテル
- ・広島支部長 11 月 20 日 富士山での滑落事故について説明(学生クラブ 学生と指導者の 2 名死亡)
中山理事、川瀬遭対委員長からもコメントあり

(山田信明 記)

平成 28 年度年次晩餐会・記念懇親山行に参加して

12 月 3 日に京王プラザホテルで開催された平成 28 年度晩餐会に山田支部長と富山支部会員 7 名が出席してきました。開会は 18 時からでしたが受付は 13 時 30 分から始まり「ゴジュンバ氷河調査の報告」と「日本山岳会関西支部東部ネパール登山隊 2016」の記念講演と第 18 回秩父宮記念山岳賞の「日本の山岳信仰と修験道に関する宗教学的的研究」の受賞記念講演がありました。皇太子殿下も聴講されました。更に会長特別表彰として「東日本大震災後の山岳放射線調査」についての記念講演もあり盛り沢山の内容でした。並行して恒例の図書交換会も開催され興味深い図書を抽選で購入することができましたが、なかなか当選することは困難なくらい盛況でした。冠松次郎の立山黒部に関する著作等は競争率が高かったのですが手に取ってみるととても感慨ふかいものがありました。そうこうしているうちに晩餐会の時刻となりました。



開会の辞、会長挨拶のあと物故会員への黙祷から始まります。この先達への敬意が日本山岳会の歴史と伝統を感じる時という印象を持ちました。新永年会員顕彰と山岳賞、会長特別表彰、新入会員の紹介等セレモニーが続き、鏡開きで晩餐会が始まりました。今回からは会員と準会員そして会

員の家族も参加して総勢約 500 人の出席者でした。皆さんとても和やかな雰囲気です。年に一度このような会を開催する意義を再確認しました。最初に出席したときは県外の方々と何を話ししていいのかわからず戸惑ったりもしましたが、山という共通点から気さくに話しかけてくださったため、今では躊躇なく立山の近況とか気軽に話をすることができるようになりました。年に一度このように多くの方々と同席できる機会は少なくなっているように感じています。この晩餐会は貴重な機会となっているのかもしれません。

(河合義則 記)

晩餐会記念懇親山行

12 月 4 日の神奈川県地方の天気予報は「晴れ後時々曇り」。予報通りの爽やかな気持ち良い山行でした。午前 7 時 50 分の集合時間に合わせ、車酔いの可能性がある私はバスの前方の座席を確保するため 7 時に新宿駅西口を出ました。地下通路を集合場所工学院大学ビルに向けて進むと、ポイントに待機してらした山行委員の方が私のザックを見て声をかけてくださり、順調に地上に出ることが出来ました。

無事バスに乗り込み 8 時に「箱根外輪山縦走」に向けて出発しました。1 号車に山行委員長の清登緑郎氏が座ってらっしゃいました。これまでの準備の大変さを思い、後部座席より一礼してしまいました。足柄パーキングでトイレ休憩の後「ふじみ茶屋」がある乙女峠登山口（標高 800m）にバスは到着しました。

乙女峠（1,005m）まで 1.1 km の急登をこなしました。丸岳（1,156m）までは 1.5 km。金時山方面に向かわず箱根山、千石原を眺めながら丸岳山頂に向かいました。



長尾峠（911m）まで 1.6 km は富士山に見守られながら足取りも軽く進みました。いよいよ富士見ヶ丘公園（1,063m）に到着すると富士山の素晴らしいすそ野に圧倒されました。広島大学OBの 24 歳の連れも出来、最後まで皆さんと足取りも軽く北アルプスでは見られない景色を楽しみました。帰りは海老名付近での事故の為、渋滞に巻き込まれましたが、運転手さんの気迫、体力で 1 時間遅れ程度で到着出来ました。

新宿駅西口近くまでバスを運んでくださり感謝でした。又 80 名近いグループ山行を成功させた委員の方々のご尽力にも感謝したいと思います。

(森田裕子 記)

12 月例会報告

期日：平成 28 年 12 月 9 日（金）18:00～

場所：C i C ビル 3F とやま市民交流館（学習室 1、2、3）

参加者：18 名

報告：支部長会議、H28 年度日本山岳会年次晩餐会の報告、登山報告（9 月赤石岳）、ネパール地震復興支援ツアーの報告

懇親会：富山駅中の「八兆屋」

昨年より寒さが強い中、12 月例会を行いました。H28 年度日本山岳会年次晩餐会など山田支部長より報告がありました。登山報告として渋谷会員より 9 月の例会山行（南アルプス・荒川三山・赤石岳）、北田会員よりネパール地震復興支援ツアーの概要をきめ細かいスライドの解説で報告され満足しました。続いて、場所を移し富山駅中の「八兆屋」にて忘年会を行いました。来年度への新たな山行などについて語り合いました。（有澤辰彦 記）

親睦会総会・1 月例会山行・瀬戸蔵山 1,320m

期日：1 月 19 日（木）～20 日（金）

参加者：山田、近藤、永山、渋谷、本郷、川田、島津、飯田、森田、河合

午後 6 時幹事室で平成 28 年度日本山岳会富山支部親睦会の総会を開催した。最初に昨年死去された河村、山岸両氏に黙祷を捧げ議事に入った。辻さんの JAC 退会あるも親睦会員はそのままということで了解をうる。現在会員数は 22 名、事業報告、会計報告も承認されて総会は終了した。

6 時 30 分より懇親会を始めた。今日、ホテルは台湾のスキーヤーが沢山泊まっており、宴会は別部屋だったが、余りにも広すぎ寒かった。

料理は最低料金の楽々コースでお粗末なものだったが皆年配でそんなにも食べられずこんなものだろう。

川田先生と飯田先生から「霰と雹」について新知識を頂いた。この道の専門家だけに有意義な話だった。なお木戸、村上両氏はインフルエンザで急遽欠席された。



例会山行「瀬戸蔵山」

朝 6 時に起きたら高曇りの空に月が霞んでいた。ゴンドラ駅 8 時集合ということで各自車で集合、駅には当日参加の本多さんが待っていた。今日は島津さんはグレンデ、登山はスキーで山田、永山、カンジキは近藤、渋谷、本多、森田と 6 名で行動を開始した。

装備を整え 8 時 40 分山頂駅を出発した。空は時おり青空も覗いて明るい。ただ風が強く地吹雪が

舞い上がる。積雪は1mあまりで杉の木にこんもり被さっている。

道は先行者が無く荒道で雪深く、渋谷さんのスノーシューは威力を発揮し大股でスイスイ、本多さんは芦峠のカンジキでズボズボ大きな穴を開けて行く。私はプラスチックのカンジキだが体力減少で大股について行けずゴボゴボ、森田さんに助けられながら必死について行く。スキーの永山さんはビンディングの調子が悪く悪戦苦闘されていた。



稜線の風は益々激しく体感温度はマイナス7～8度ぐらいだろう。ブナ林の奥に鋏崎山が見事な雪煙を吹き上げていた。久しぶりに冬山登山の感触が蘇ってきた。眼を左に転じると毛勝三山の向こうに遠く純白に輝く峰が見える。永山さんの山座同定によると僧ヶ岳、駒ヶ岳とのこと、見事な展望である。

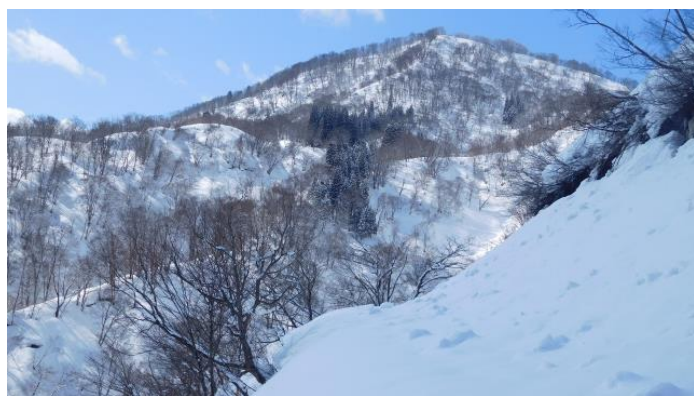
皆は9時50分瀬戸蔵山へ到着、10分ほど遅れて最後に私が到着した。風は止むことなく地吹雪を吹き上げている。予報通り空模様も段々悪くなってきたのでここで登山中止としガスコンロでコーヒーを沸かしティータイムとした。

10時30分下山に移る。下りはスキー組は快適に滑り降りてゆくがカンジキはボコボコ潜りながら11時20分ゴンドラ駅に到着した。駅は実に静かだった。その筈、強風でゴンドラは運行中止、止むなく歩き組はゲレンデをテクテク下山した。山田、永山、近藤のスキー組は貸し切りゲレンデで我が世の春を謳歌して今年度の初山行を終えた。(近藤晋 記)

2月例会山行・高坪山 1,014m

期日：平成29年2月19日(日)

参加者：山田、永山、近藤、本郷、渋谷



平村・相倉合掌造り集落駐車場に9:00集合。予想に反して絶好の登山日和。相倉民俗館横からスギ林のなかに入る。スギ林を抜けると鹿熊峠へと続く林道に出る。御世仏山 1,031mが目目の前に見えている。斜面には、マンサク、コナラ、クロモジなどの落葉樹が心なしか冬芽を膨らませて春を待つ。シジュウカラの地鳴きが林のなかに聞こえる。地蔵様が祀られている。囲いがしてありお顔は拝めない。沢を挟んだ左側

には633mの小ピークがある。左右から急斜面が迫り喉のような所である。狭い雪のトラバースで、ブロックの崩壊に注意しながら進む。やがて雪尾根が支線を伸ばしているのが見える。この尾根に

取り付くことにする。沢の渡れそうな場所を探して対岸に渡り、雪壁を強引に登る。ひょっこり林道高坪線に出た。カーブを曲がると目の前に高坪山が聳えている。まだ時間がかかりそうである。ブロック崩壊地を慎重に通過して、林道高坪線を登って行く。ヤシャブシやハンノキが去年の茶色の球果をいっぱいつけている。カエデの仲間は枝を赤く染め始めている。深い雪に覆われている山々に春の匂いが感じられる。風もなく冬の陽光が雪面に反射して眩しい。

稜線に取り付いて、いよいよ高坪山を目指して急な斜面を登って行く。新たに新雪が 20cm ぐらい雪面に乗っている。あと頂上まで高低差 150m 地点で一息入れる。右奥には、袴腰山、高落場山、左手にはマルツンボリ山から人形山のなだらかな山容が連なる。高坪山の山体が仰ぐような位置にある。傾斜はさらに増し、雪崩に注意しながら一步一步登って行く。ブナの巨木も現れ、ウダイカン



バが多く生えている。頂上は手が届きそうだが、なかなか着かない。雪面の急登に悪戦苦闘する。ようやく登り詰めると広い台地で、木の枝に結びつけられていたペナントが風になびいている。近藤さんと本郷さんは、途中で下山するとのこと。私はスノーシュー歩きなので、下山は山田・永山さんのスキー組に迷惑をかけないように、先に下山を開始する。雪が緩んできて難儀する。林道高坪線で最初に高坪山を見た場所まで一気に下った。ほどなく山田・永山組と合流する。帰路、ブロック崩壊の危険がある場所を慎重に通過して、相倉の駐車場に着いた。予想以上に手ごわい山であった。でも、雪山の醍醐味を心ゆくまで味わった。帰路、梨谷トンネル手前から見る人形山、それは素敵であった。

(コースタイム) 相倉集落 9:20----林道高坪線 11:00----高坪山・尾根の取り付け 11:50----高坪

山 12:55----尾根の取り付け 13:33----相倉民俗館横 14:30

(渋谷茂 記)

日本山岳会富山支部創立 70 周年記念事業 実行委員会だより

実行委員長 松本睦男

これまでに決定した内容についてお知らせします。記念事業は平成 29 年 4 月(総会)から平成 30 年 3 月 25 日までに実施する。

1. 記念式典・祝賀会・講演会：平成 30 年 3 月 25 日(日)、富山第一ホテルにて
 - ・感謝状贈呈：満 77 歳以上の会員のうち在籍 20 年以上又は支部役員 10 年以上務めた会員を表彰
 - ・記念講演：公益事業として実施しているものを記念事業として行う

2. 記念誌の発刊

- ・平成 30 年 3 月 25 日に発刊予定
- ・60 周年以降支部会報に掲載されたものから編集するが、会員から 70 周年にあたり支部活動や山・自然とのかかわりなどの随想も募集しますので執筆の準備をお願いします。
- ・編集委員は川田・北田・金尾・渋谷・河合・山田・松本・有沢の 8 名が担当

3. 記念山行

- ・国内：6 月、熊本地震復興祈念登山を計画
- ・海外：ブータントレッキングを調査中（10 月下旬～11 月上旬）
- ・計画の詳細は平成 29 年度支部総会で発表できるよう準備する。

会員のご協力をお願いいたします。

ネパール地震復興支援ツアー報告

－2016 年 11 月 14 日～25 日－

北田幹夫

「富山ネパール文化交流協会」は、2015 年 4 月のネパール大地震の際に、県民有志と富山に住むネパール人が協力して発足した。5 月には最初の支援活動としてネパール人 2 名が故郷の村を訪れ、被害の状況を直接確認するとともに、米、トタン板等の緊急支援物資を直接届けた（右写真、支部会報第 99 号）。地震の規模は支部会報第 100 号に寄稿された辻斉会員によれば、4 月 25 日の本震がマグニチュード 7.8 で震源はマナスル山麓ゴルカ県、5 月 12 日の最大規模の余震がマグニチュード 7.3 でランタン・ヒマールの山麓が震源となり、大きな被害が発生。この震災で 9,000 名に近い死亡者数が発表された。



協会では、特に 5 月の大きな余震で被害を受けたカトマンズ東方のバグマティ県シンドゥパルチョーク郡を中心に実態を調べるとともに、支援方法を検討し、短期的には道路や学校など教育施設の補修（右写真）、長期的には住宅の耐震化に向けた支援をすることとした。今回は、その成果、復旧の状態を確認するとともに、今後の支援の在り方を考える目的で訪問した。メンバーは、交流協会から 4 名、「アジア子供の夢」（川渕映子代表）から 5



名、その他賛同者を含め 13 名がカトマンズに集合。震災後初めて参加した私は、これまで間接的に聞いていたネパール大震災の実態を自分の目で確認することができた。また、甚大な被害を受けたカトマンズ盆地の世界文化遺産を訪れるとともに、震災前と変わらぬ姿で聳えるヒマラヤの景観を感慨深く眺めて来た。

ネパール人のガイド、運転手を含め総勢 17 名となった



一行は2台のランドクルーザーに分乗し、カトマンズ、バクタプール、ドゥリケルを経てアルニコ・ハイウェイを走る。ナガルコット、カカニと並んでカトマンズ周辺のヒマラヤンビュースポットのドゥリケルを過ぎると車窓にアンナプルナからマナスルにかけての雄大な山並みが目に飛び込んでくるが、満員の車にギュウ詰め状態で良い写真がとれない。やがてチベットから流れる川に沿って走り、通行チェックの検問所を過ぎて橋を渡る。いよいよ目的のリサンク村への山道で徐々に舗装が途切れ、次第にデコボコだらけのオフロードとなる。道端には地震の影響か、道路改修のためかわからない岩がころがり、カーブで停車して切り返すことも度々となる（前頁下写真）。乾期でさえこの状態なので、雨期にはぬかるんで難儀することが容易に想像される。途中で休憩した村では地震の影響で全壊したと思われるレンガ作りの家そのまゝの状態で放置されていた（右上写真）。



カトマンズを出て7時間後ようやくリサンク村に到着。村人の盛大な歓迎を受ける。「アジア子供の夢」の支援で住民による道路の改修が進み、特に道路脇の側溝がきれいに整備された。リサンク村の小学校は屋根が落ちて半壊状態だったものを、被害の少なかった部分を補修し屋根にトタン板を架けて使っていたが、校舎の左側は壊れたままの状態であった。その後、村の仏教寺院の裏手にある仏塔を訪れる。地震の影響で完全に壊れ、崩れた塔と「仏陀の知恵の目」が痛ましい。再建工事に着手しているが、資金が足りないとのことで急きょ寄付をする。

カトマンズ盆地で7ヶ所登録されている世界文化遺産はカトマンズ、バクタプール、パタンの王宮広場の古い建物で甚大な被害が見受けられ、復旧に向けた取り組みが始まっていた。しかし、周辺の建物は応急処置のみで使われており、危険な状態が各所で見られた。スワヤンブナート寺院、チャグナラヤン寺院でも被害が大きく、ボダナート寺院、パシュパティナート寺院の被害は比較的小さいとのことであった。これらの施設では外国人観光客に対して入場料を徴収して復旧資金に充てていた（右写真）。



最後に、変わらぬ姿で聳える白き峰々である。ポカラ近郊のサランコットからは朝日に輝くダウラギリ、アンナプルナ、マチャブチャレの山並みを眺望（左写真）。日本山妙法寺からはフェワ湖越しの山並み。前出のカトマンズ周辺のビュースポットからはアンナプルナ、マナスル、ガネッシュ、ランタン、ドルデラッパ、ガウリシャンカールの峰々。仏教の聖地ナモブッダからは、黄金色に輝く寺院と見事に

開かれた棚田の向こうにドルデラッパ、ガウリシャンカールを遠望することができた。今回の地震では世界自然遺産のサガルマータ国立公園やランタン谷でも大きな被害が出ている。山の上まで開かれた棚田や仏教寺院が残るネパールは日本とのつながりが深く心の故郷とも言える。今ここを訪ね現状を理解することが、この国への何よりの震災復興支援になるであろう。

コスタリカ道中記

－2017 年 1 月 4 日～16 日－

鍛冶哲郎

コスタリカはエコツアー発祥の地で、観光・環境立国と聞いていたので前から行ってみたいと思っていたが、この年明けに実現した。成田発着の 13 日間の旅で、総勢 10 名、私を含む 3 人が先発し、2 日遅れの 7 名と現地で合流した。コスタリカは、南米側がパナマ、北はニカラグアと接する。面積は九州と四国を合わせたくらいで、人口は約 500 万人、大陸分水嶺に火山が連なり、最高峰は 3,820m のチリポ山である。旅行直前まで知らなかったのだが、コスタリカは、中米で最も安定した民主国家であり、憲法で軍隊を禁止している。南北アメリカではカナダに次ぐ長寿国であり、電力の 88%は再生可能エネルギーでまかない (2015 年)、2022 年に 100%を目指す。人権擁護の国で、近隣諸国の政変時に亡命者を受け入れてきた。理想をかかげ、実現させている国なのである

先発隊は、往きのダラス乗換で早くも躓いた。アメリカは単なる乗換でも、一旦、入国しなければならぬ。面倒な入・出国のチェックを受けて再度空港内に入り、サンホセ行きの搭乗口を探したが見当たらない。通りかかった空港関係者らしき女性に訊いたら、「サンホセ便は欠航です」と搭乗予定のアメリカン航空 (AA) のカウンターへ連れて行ってくれた。AA 嬢は欠航理由は気象条件としかいわないが、火山噴火によるサンホセの視界不良であった。AA 嬢「明日のサンホセ便は満席、今日ダラス泊で明日マイアミ経由なら空席があるが、現地の気象条件ゆえ明日飛ぶという保証はない、ダラスのホテルは自己負担」とつれない。ダラス泊やむなしとホテルの手配を頼んだところで、AA 嬢「ちょっと待って、今なら、リベリア行きの便に間に合う、どうします?」。リベリア?聞いたこともないが、とにかくコスタリカへ行こうとリベリア便に飛び乗った。この間、2 時間は要したが、案内嬢が親切にもずっと付き添ってくれた。リベリア空港に着いてすぐ、サンホセ空港に出迎え予定のホセ氏に電話をした。ホセ氏「今どこだ?」、「リベリアに降りた」と答えたら、手回し良くリベリアのホテルを用意してくれたのは良かったが、成田で預けたバッグが出てこない。ダラスで AA 嬢に念を押したら、「心配無用」と請け合ってくれたのに、だ。持病の薬を山ほど持ってきた友人は、空港係員に「薬は預けない方がいいですよ」と諭される始末である。バッグを回収できないまま、バスとタクシーを乗り継いでホテルへ行き、翌朝、サンホセから来たホセ氏の車で最初の訪問地モンテベルデに向かった。リベリアは静かな田舎町で、ホテルもレストランもリーズナブル、熱帯の乾季の気候が心地よかった。

モンテベルデの見どころは、標高 1,100m から 1,700m の熱帯雲霧林であり、多様な動植物である。雲霧林に一步入ると、緑の密度に圧倒される。木々は根元から天辺までびっしりと着生植物で覆われ、天空の枝からは何本もの気根やツルが垂れ下がっている。大木一本に 500 種くらい着生しているという。サトイモ科、ラン科、シダ類などが目立ち、観葉植物園のようで、その活力と造形美は見事である (写真 1)。モンテベルデはコスタリカの観光地でありながら、建物など施設は控えめ



で自然に融和している。保護区へのアクセス道は舗装しない方針が徹底しており、日本では有りえない急こう配だから、タクシーはすべて 4WD のワゴン車である。我々3人は、行方不明のバッグと後発の 7 人を待ちながらモンテベルデを探索した。バッグは 2 日遅れでバイクでホテルに届きほっとしたが、後発組は、今度は噴火ではなくて AA の都合

で飛行機が飛ばず、ダラスで一夜の足止めになったとの連絡が入った。全員そろった日は、太平洋に落ちる夕日が翌日の好天を予感させ、晚餐は大いに盛り上がったが、無慈悲にも夜半に風が出てきて翌日からは嵐である。それでも、雨の合間にガイドツアーで雲霧林を歩いたり、屋内の施設を見学したり、地元の素朴でおいしい食事をしたりで、いろんな発見があった。次の目的地、アレナルも荒れ模様の天気であったが、宿で昼食とチェックインをすませ、車で近くにあるタバコン温泉へ行った。タバコン温泉は、適温のお湯が流れる川のいたるところで温泉浴ができる。知床のカムイワッカよりはるかに湯量が多い。バー付きの大きなプールもあって、高級リゾートの華やかさがある。温泉浴と夕食で満ち足りて、あとは寝るだけと車で宿に向ったが、宿の 4km 手前で倒木が道路をふさいでいた。温泉でふやけている間に倒れたのだ。切れた電線が垂れ下がり危険な状態だ。宿から別の車で迎えに来てもらおうにも電話が通じない。一時はバス内の一夜を覚悟したが、夜も更けたところに最寄りのフォルトナという町まで下り、別のホテルに泊まることができた。現地ツアー会社に感謝である。翌朝、復旧した道路でアレナルの宿に戻り、休む間もなくチェックアウトをして次の目的地のサラピキへ向かった。サラピキでは、近くのカカオ農園を訪れ、チョコレートの伝統的な製造過程を見学し、ホテルのナイトツアーに参加した。次の日は、車とボートを乗り継いで、最後の目的地、カリブ海岸のトルトゲーロで二泊した。トルトゲーロでは、時々、驟雨に見舞われたものの天気も回復し、ボート・ツアーやホテルの周辺で様々な熱帯の珍しい動植物を見てくつろいだ。

コスタリカのエコツアーは、国立公園などの保護区に隣接する宿を拠点に、自然を探索する形態が多く、さまざまなメニューが用意されている。多くのホテルは周囲に広大な森林を持っているから、ホテルの敷地内だけでもかなりの自然探索ができる。ガイドなしでもよいが、ガイドの有無で見られる動植物の数に雲泥の差があるから、ガイドツアーがお勧めである。特に動物は、ワニ、サル、ナマケモノのような大きなものですら慣れないと見逃すことが多い。まして、芸術的



な擬態で周囲に溶け込んだ昆虫（写真2）や両生・爬虫類にいたっては、だまし絵を見ているようなもので、それと教えられてもわからない。識別できた時の感動は大きく、次は独力で見つけたい。

帰りのサンホセ空港は、大半が欧米人の観光客で、大変な混雑であった。飛行機の乗り換えのため、帰路ではマイアミで一泊したが、またしてもサンホセ空港で預けた9人の荷物が2人分しか出てこず、入国とロストバッグの手続きに時間を取られてしまった。結局、残りのバッグは成田着時に回収できたが、AA航空の体質なのか、あるいはアメリカの出入国管理によるものなのか、腑に落ちないことであった。最後まで気をもんだ旅であったが、コスタリカは、安心して気持ち良く旅行できる国であった。

日本初のヒマラヤ遠征に関わる話（その1）

佐伯郁夫

竹節作太氏と対談する

北日本新聞1月12日の紙面に、立教大学ヒマラヤナンダコート遠征隊が第4キャンプに使ったテントが竹節作太の生家の納屋で発見されたことが記事として大きく取り上げられた。私はかつて竹節作太氏と話したことがあるので、そのことについて書き残しておきたい。

立山町宮路の金田秀郎氏が梅池高原松沢口のバス停近くに“ヒュッテらいちょう”というスキー宿を経営していたころ、そこは私のいきつけの宿であった。同じ敷地の一角に白い建物があり、あまり使われた形跡がないので、あの建物は何かと聞いたところ竹節作太の別荘で望むなら売ってくれるかもしれないということであった。

竹節作太という人は飯山中学から早稲田大学商学部に入り、在学中に第2回冬季オリンピックに日本人初の代表として出場。その経歴を買われて、1929年毎日新聞社に入社しスキー・山岳記者となる。1936年立教大学山岳部ナンダコート隊に参加し登頂する。1952年日本山岳会マナスル踏査隊、1953年第一次マナスル登山隊、1954年第二次マナスル登山隊に参加、1959年毎日新聞社を退職する。同郷の五島慶太が創業した東急観光に迎えられ梅池スキー場関係の仕事をしていた。（注1）

私はある年の4月下旬頃、ゴンドラ中間駅にある東急山荘に竹節氏を訪ねた。例の別荘について話し始めると、売ってもいいがプレハブの建物だけで土地は借地とのこと。私は失望しその話は打ち切ったが、話題は厳冬期早月尾根登山やヒマラヤのことになった。私は手土産も持参しなかったのに、彼は酒をあたたためはじめる。饒舌な人で多くのことを話してくれた。

厳冬期早月尾根の初登頂

新聞は正月には明るく話題性のあるニュースを流したいので何かないと模索していたので、馬場島からの早月尾根を提案したところ新聞社で認められる。厳冬期剣岳は1924年慶応大学山岳部によって別山尾根から登られていたが、早月尾根はその時点で未登でそれなりにニュースバリューはあったと考えられる。費用も全額新聞社が引き受ける。竹節は1934年12月22日上市で合流した芦峠の人夫4名（注2）と前年完成したばかりの馬場島剣の家（注3）へ入った。そこには立教大学と青山学院のパーティが入山していた。24日は青学と合同で1,900mまでラッセルし1,300mまで下が

ってテントを設営する。夜半に立教パーティがテントの前を通っていく。馬場島を 23:40 に登ったものである。竹節も人夫 2 名を伴って後を追う。夜明け頃には 2,600m で合流。立教の須賀幹夫と竹節作太は 10:10 に剣岳頂上に到着。20 分休んで下山。この年はこれまで記録に見ない雪の少ない年で、須賀は往復 17 時間で登ったことになる。テントキーパーをしていた人夫 2 人に伊折へ酒を買いに走らせ、登頂を祝って盛大な酒盛りとなる。鹿島槍登攀のあと早月尾根隊のサポートにきた湯浅巖（立教）らも馬場島にいた。この時、立教がヒマラヤの遠征計画を持っていることを竹節は知る。日本初のヒマラヤ遠征の話が厳冬期の早月尾根登頂ではじまったのである。（つづく）

- ・注 1 同じ頃の創業である西武と東急は鉄道、百貨店、観光開発と競い上越線に西武は苗場スキー場、大糸線に東急が八方尾根・拇池スキー場を開発した。東急の五島慶太は同郷の竹節が定年になった年から迎えていた。
- ・注 2 その 4 人の中で一番若かったのが佐伯文蔵で当時 20 歳、後に剣沢小屋を経営。私は彼の晩年まで親しく交流。この時の話もよく聞いていた。『剣岳の大將 文蔵』実業之日本社(1974 年 8 月 10 日刊)にも。
- ・注 3 今の中山登山口駐車場の位置に白萩村中村、松岡孫右衛門・松岡作次郎によって収容人員 80 名の立派な小屋が 1933 年に建てられた。『立山ガイド史』五十嶋一晃著に写真がある。

会員動向

○新入会員・準会員

- ・浦井正子 うらいまさこ (63) 11 月入会 会員番号 16102 南砺市安居 (福野)

自己紹介：出身は新潟の関川村で、高校 1 年生の時に村民登山に誘われて杵差岳(エブリサシ 1636.4m)に登頂したのが最初です。結婚してからは、北アルプスや五箇山など主に県内の山を夫と共に登りました。今後、仕事をやめるなどして登山の機会が増えるかと思い入会を申し込みました。近所で昨年遭難騒ぎが発生し、山岳保険などにもしっかりと加入しておきたいというのも動機です。健康のためにも、山登りは続けたいと思っておりますので、皆さんどうかよろしく願いいたします。

- ・瀬川富士夫 せがわふじお (64) 12 月入会 会員番号 16119 南砺市川西 (福光)

自己紹介：登山スタイルは北アルプスや北陸の山を中心としてきましたが、ここ 10 年あまりは個人山行が多く、山域を決め一度に 2、3 座を稼ぐような山行をしています。年代的には百名山世代ですが固執せず、たぶん完結は無理で楽しみながら登り、ご当地の名湯、地酒、グルメそして朱印集めと総合的な山行を心がけています。こんな自分ではありますが、よろしくお願いします。

- ・吉井一美 よしいひとみ (60) 12 月入会 会員番号 A0006 氷見市中央町

自己紹介：準会員の吉井です。氷見に住んでいますが、山が好きで仕事が一段落したので日本山岳会の行事に参加して楽しみたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

○退会

・辻齊（会員番号 12169）11 月退会

「---日本山岳会には長い間お世話になりながら申し訳ありませんが、これ以上皆さんにご迷惑をおかけするわけにはいきませんので、75 歳になりました今、退会させていただきたいと思います。長い間大変お世話になりありがとうございました。---退職してからネパールに没頭しており日本山岳会富山支部の皆さんには何もご協力できずに残念です。75 歳という年齢と同時に病気とも闘いながら今後を生きねばなりません。心臓、腰痛ですが、ドクターからは身体を動かすことも大切と言われています。ストレスのない楽しむスポーツが最も病気に良いそうです。---長かったネパールもこの 11 月末からの支援活動ですべてが終了します。ヒマラヤ展望を兼ねて仲間と 4 名で出かけてまいります。山岳会の皆さんにも、ご健康で山登りを楽しまれるようにお祈り申し上げます。」（2016 年 10 月のメールから）

支部会報第 103 号の訂正

新入会員 2 名の住所が入れ替わっていました。正しくは以下の通りです。

- ・前田充一 まえだじゅういち（69）5 月入会 会員番号 16009 富山市八尾町東町
- ・佐藤隆明 さとうたかあき （31）8 月入会 会員番号 16073 富山市千石町

平成29年度 富山支部総会

期日：平成29年4月12日（水）18:00～

会場：富山電気ビル

3 月下旬に、改めて案内申し上げます。

編 集 後 記

雪のない年末年始であった。その後一転、まとまった積雪があり、除雪に汗をかいた。1月20日の例会山行は瀬戸蔵山に登る。強風が吹き荒れ雪煙が舞い、冬山の醍醐味を味わう。支部創立70周年を迎える。記念登山は、海外はブータン、国内は「熊本地震復興祈念登山」と銘うち九州の山を計画している。記念式典や記念誌の発刊など鋭意準備中。会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

（渋谷茂 記）

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第 104 号

発行者：山田信明 編集者：渋谷茂・北田幹夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204 河合義則方

電話 076-492-3936 090-4326-6197 E メール kawa-mori55@air.ocn.ne.jp